

学的研究」研究代表和崎春日名古屋大学文学研究科教授、課題番号16202024)の支援を受けて、「来住アフリカ人とネパール人の共同に関するアジア地域(ネパール)における商業・文化活動の調査、文献資料収集を2007年3月18日から3月31日にかけてネパール、カトマンズ市域において行う予定である。

その他の補助業務の内容

研究活動を円滑に進めるべく、私の技術経験を生かしたPC等研究環境の充実を提案支援している。

注

- 1) 1960年代以降大量に流入してきたチベット本土からのチベット人難民はボテとは呼ばれず、一応の区別がなされている。
- 2) 居住地域に対しパハディ(Pahadi)とマデシ(Madeshi)という分け方がある。パハディとは、丘陵地帯出身者で、マデシはタライ平野出身者をさす。パハディは、カースト制度を持つパルパテといくつかのエスニック・グループから構成され、全人口の6割以上を占める。

引用文献

Hagen, Toni. 1980 "The Kingdom in the Himalayas" 町田靖治訳『ネパール』白水社 1990

名和克郎 1997「カーストと民族の間」石井溥編『暮らしがわかるアジア読本ネパール』河出書房新社 pp. 46-54

カメルーン・グラスランド地域における文化人類学的研究 ——仮面文化に関するフィールドワーク・仮面使用と文化様式における関連性に着目して

後藤 澄子

文化人類学・宗教学・日本思想史専門 後期課程3年

研究の目的

本研究は、現地調査に基づいてカメルーン高地、王制社会の仮面文化に関する詳細な民族誌的記述を行い、アフリカにおける王制と仮面文化の関連を明らかにするとともに、仮面と権力の関係に関する人類普遍の理論モデルの構築を目指すものである。

アフリカの仮面に関する民族誌的研究は、国内外でそれなりの蓄積があるものの、多くは王制研究とは全く別の文脈で展開されてきた。しかし、仮面活動と王の活動は、ともに「社会における権力」という観点からみれば同列に扱える主題であり、本研究は、アフリカの王制社会および首長制社会に対する理解に通じるものと考えられる。

本研究では、以上の問題意識のもとに、まず王と仮面結社が並存するカメルーン高地において現地調査を行い、特に仮面結社の観点から、仮面活動と王制の関係を明らかにする。特に、「仮面活動を通じた周辺地域との交流活動」という側面にスポットを当てながら、当該社会と周辺社会との交流を描く。その上で仮面活動を物質文化的な側面と、仮面への概念を中心とした象徴的な側面を論じつつこれを社会動態的に捉えることを目指す。これまでの調査研究で明らかになった Wimum の社会組織と仮面に関する諸研究を基に、仮面様式の比較を行い、物質的側面から周辺地域との

交流を明らかにする。また同時に、仮面結社の入手経緯に関する伝承を収集することによって、19世紀末～20世紀初頭にかけての王国成立史を解明するための一資料を作成することを目的とする。

調査内容与方法

調査方法

調査対象地域として、カメルーン北西部州バメンダ高原地域社会、特にンカンベ首長社会を設定し、以下の項目を調査した。なお、調査地においては一般家庭に下宿し、日常生活を共にしながらインタビューと参与観察を並行する形で行った。

1. 首長制社会において仮面の果たす社会的機能に関する側面
 - 仮面を所有する組織や結社に関する詳細
 - 仮面結社と結社が所有する仮面に関する結社成員・非成員の両方が与える概念調査
 - 歴史的背景——首長制社会の成立経緯と変遷
 - 仮面が登場する祝祭、特に王族の葬祭や即位式等の場における仮面活動
2. 仮面とジェンダーに関する側面
 - 仮面に関する女性禁忌(タブー)に関する概念の変化
 - 王制に属する女性の組織集団を調査
3. 仮面活動の現代的展開に関する側面

地元住民の知識層が中心となって設立された NKACDA (*Nkambe Cultural Development Association*) 組織の形態と活動内容、運営状況などについてインタビューを中心に調査する。また、都市部における上部組織、同郷出身者組織との関わりについても同様に調査を行う。

調査内容

2005年2月～4月：予備調査

ンカンベ社会において約2ヶ月滞在し、ンカンベ社会に存在する結社・集団の名称と役割、人々が与える意味づけに就いて調査した。特に、ンカンベ村落内の各地区に存在する主要な仮面結社と、王制に直接関係すると考えられている2つの主要結社について、成員構成と成立経緯、活動内容について調査を行った。

また、当地域に存在する女性組織のうち、特に王族女性によって構成される結社「*toh* (ト)」について参与観察を行った。

2005年8月～2006年2月：滞在調査

ンカンベ社会に約6ヶ月滞在し、ンカンベ社会の主要結社、ムワロン結社とンギリ結社の各成員3名ずつ選定し1人当たり平均7回の聞き取り調査を行った。なお、使用言語は英語と現地語 (*limbum*)、ピジン英語である。聞き取り内容は、結社が所有する仮面ごとに、面の形態、素材、意味づけ、使用方法、保管方法、伝承、使用に関する禁忌など詳細な項目を設定した。また、結社自体の成員数、組織構成、伝承、購入経緯についての情報も収集した。

参与観察は、滞在中行われた葬式・埋葬儀礼(9月、11月、1月)と祝祭時に行った。特に、NKACDA (*Nkambe Cultural Development Association*) による祝祭(11月24、25、26日)時は、登場した仮面を撮影し、写真及び映像資料を入手した。これらを元に、上記の聞き取り調査を行った。また、仮面に関する資料収集以外に、ンカンベ住民の生業観察として、主に農作業時に同行した。

まとめ

仮面結社と首長制社会

ンカンベ社会に存在する結社の中で、人々が最も力(呪力、政治的権威)を持つものと考えている結社がムワロン (*mwarong*) 結社である。そしてこれに対抗、並存するものとしてンギリ (*ngiri*) 結社が存在する。この2つの結社関係を中心にンカンベにおける結社と首長制社会について考察した。ムワロン結社とンギリ

結社は政治権力的には明らかに上下関係にあるが、両者は対立する関係性も持つ。両者の仮面には名称やキャラクターなどに共通性があるが、両者の仮面が対峙する時、ンギリが優先される。以上から、仮面同士の関係性において、両者は必ずしもムワロン>ンギリの図式ではなく、むしろ拮抗するものとして捉えることができる。

これまで、ンカンベ社会を含めたバメンダ地域の首長制社会における首長は「神聖王的存在」の側面が強調されてきた。そして結社や社会組織も首長の権力を保障するものとして語られてきた。ンカンベに存在する結社は首長を頂点とした村長、地区長の順で成り立つピラミッド型権力構造に従う単位であるにも関わらず、各結社の詳細を見ていくと、必ずしも上記の権力関係に従いきれない側面があることがわかる。

結社の起源

ムワロンの購入時期と経緯については、幾つかの情報が得られている。正確な年代ははっきりとしないが、現在の首長から逆算していくと、19世紀中頃、ドイツ入植前であったと推測される。当時、周辺地域ではムワロンを購入することが流行していた。ンカンベも、ムワロンを Kungi 村へ伝えている。

周辺地域との関係

ムワロンの起源とされるジョッティン Jottin 村はノニ Noni 地域に位置し、オク Oku 社会とバンソ Banso 社会の影響を強く受けている地域である。ンカンベをはじめとした *wimum* の人々は、オクやババンキ Babanki 等から仮面やダブルゴングを購入してきた。聞き取りに拠ると、現在ンカンベで使用されている仮面や楽器は、オク、ババンキ産のものが多い。即ち、ンカンベにとってはオク、また Ndop 平原の村は文化的に先進国であったと考えられる。

オクはクウィフォン *kwifon* 結社を持つ社会である。また、クウィフォンの下位組織であるフランガン *flangang* 結社はマボ *mabuh* という仮面を持つことが報告されている (Argenti, 2006)。オク社会のマボとンカンベのマボは、仮面のデザインや装束に殆ど違いは無いものの、登場する場や仮面のパフォーマンスには多少の差が見受けられる。*kwifon* (及び *flangang*) の仮面をそのままンカンベの事例に当てはめることは難しいが、両者の比較を続けて行っていく必要がある。

